

アナログ重視型Ma a S実装の諸活動

十勝バス／KPMGモビリティ研究所

十勝バス（野村文吾社長、北海道帯広市）は、高齢化が進展

し地域の商店や飲食店の撤退も

相次ぐ帯広市郊外の「大空団

地」で、路線バスを活用した地

域活性化の取り組みを展開して

いる。デジタル化を前提とせ

ず、幅広い世代を対象を広げ、

町づくりにつなげているのが特

徴だ。アナログでの成功体験に

基づくMa a S（サービスとし

てのモビリティ）の社会実装で

成果を上げている。

同地域では交通手段の9割以

上を自家用車が占めている。コ

ロナ禍の影響もあり、バス路線

の維持が危機的な状況となっ

ていた。さらに、地域の商店も事

業継続が困難となり、移動難民

・買い物難民の発生が懸念され

る状況だった。

十勝バスは、大手からの投資

を引き出すためにも自ら町づく

りに動き出す。帯広市地域公共

交通活性化協議会の実証試験と

して市内循環バスの運行を開

始。沿線住民を戸別訪問し、バ

スに乗らない理由を調査した。

その声を基に、利用方法の周知

などで不安を解消するととも

に、目的地提案を行うなど、利

用者拡大に努めた。

2020年10月から大空団地

住民向けに電話受付、ドライバ

ーによる経路設定を行うアナロ

グ版デマンド交通の運行を開

始。実績が1日当たり10件に達

した段階で、AIシステムを導入し、オンデマンド相乗りサービスへと発展させている。

21年にKPMGモビリティ研

究所と「十勝・帯広新モビリテ

ィ検討協議会」を結成。マルシ

エ機能付き路線バスを運行して

住民徒歩圏の生活の質向上にも

取り組み、地方公共交通事業者

の新たな収益源になり得る可能

性を示した。

このマルシェバスで見られた

「井戸端会議」をはじめとして

地域住民への憩いの場の提供を

目的として、大空団地内に焼き

肉店を開業。営業時間外はフリ

ースペースとして地域に開放

し、スマートフォン教室や英会

話教室を実施するなど、賑わい

の創出にも役立てている。



【選考委員コメント】

高齢化・人口減少による地域の課題に対し、地道な努力を重ねている。コミュニティ活性化のための新しいアイデアを実証するとともに、お客さまの声を直接聞くなど実態に則した行動を基にデジタルツールの活用し、Ma a Sとして社会実装への道筋をつけ、成果を上げている。同様な社会課題に疲弊する地域へ光を灯すものであり、コロナ禍で大きな打撃を受けている地域公共交通事業者にも明るい話題として浸透していくことが期待される。

コミュニティづくりベースに地域再活性化